

おかべさんのこと

並木せつ子

『よい子への道』『おばけやさん』『コドモの定番』などの著者おかべりかは、私が勤務していた図書館のある町に住んでいた。元々この町生まれこの町育ちの「土地っ子」で、本人もそれを少しだけ誇りにしていたように思う。作品の背景にさり気なくこの町の風景が描かれていることもあった。

そんなご縁で、図書館でも、著者所有の原画をお借りして原画展を開いたり、「お絵かきあそび」という子ども向け行事の講師をお願いしたりした。大人向けの講座は、誰からの依頼であっても頑なに断り続ける人だったが、こういう依頼には格安の講師料にもかかわらず（かたじけなくも無料のときもあった）気軽に応じてくれたのである。

「お絵かきあそび」は、夏休みの小学生向け行事で、毎年「変顔つくろう」「こわ〜い絵をかこう」「おみくじを作ろう」など大雑把なテーマは決めるが、参加者に2時間自由に好きなだけ絵を描いてもらおうというのが主旨。講師といっても、ちょっとしたアドバイスはするものの、ひたすら励ますのみで描き方を伝授するわけではない。この行事の時間内だけでも、教師も保護者もいないところで、のびのびと絵を描いて楽しんでほしいというのが、おかべさんの強い希望だった。これが「お絵かき教室」ではなく「お絵かきあそび」とした所以である。

子どもだって辛いこともあれば、理不尽な目にもあう。そんなとき絵を描くのが好きな子だったら、絵に没頭すれば逃げ道の一つになり得る、というのが自身の体験から得た信念だった。だからお絵かきを楽しんでいると思っていただければよかったのである。会場では子どもの自由な発想や根気に驚かされることも多

かった。

この行事は、おかべさんが2017年に急逝する前年まで、市内の3つの図書館で8年間続いた。2017年も開催は決まっていた、訃報を聞いたのは夏休み直前の7月だった。もはや終わった後の「疲れた！ でも！楽しかった！」という嬉しそうな声を聞くことはできない。

亡くなった翌年、おかべさんと親しかった編集者やデザイナーたちと計り、「おかべりか展」を開いた。高田馬場の小さなカフェを借りた5日間だけの小さな小さな会だったが、私的に描いていたクロッキー帳やスケッチブックの中の絵、幼稚園時代の絵など、公になっていないものばかりだったので、会場を訪れたゆかりの人々には一様に喜んでもらえたようである。

会期の終わる頃訪れた一人の若い女性に一狭い店なのでどの来場者にもそうするように、声をかけた。たぶん「おかべさんのファンですか」とか「この催しをどこで知りましたか」とか、何気ない問いかけだったと思う。するとその女性は突然ぼろぼろと涙をこぼし始めた。聞けば「小学生のとき図書館の『おえかきあそび』に参加して以来ずっとファンだった」という。今は美術系の大学に学んでいて、将来漫画家になりたいとも言っていた。本人が聞いたらどんなに嬉しく思ったことだろう。私が初めておかべさんの仕事を羨ましいと思った一瞬でもあった。

おかべさんは自分のことを、こんな風に書かれるのをいやがる人だったから、今頃怒っているかもしれない。でも図書館の行事に参加して、その講師にあこがれ進路を定めた子どもがいたことを、自分の作品を「イロモノ」と謙遜して言っていたおかべりかのためにも、仕事に手応えを感じにくい今の状況の中で働いている、図書館職員のためにも書き残しておきたかったのである。

(なみき せつこ)

のら書店の本づくり

～新刊『おまつりをたのしんだおつきさま』～

佐藤友紀子

のら書店は、創業37年目の子どもの本の出版社です。小さな出版社として、飯田橋の路地裏で本を作っていました。新刊は年間3～4点です。他の出版社に比べると圧倒的に点数が少ないのですが、どのような本作りをしているのか、新刊の制作エピソードをご紹介します。

新刊『おまつりをたのしんだおつきさま』は、メキシコの昔話の絵本です。はじめてこの絵本の原書『The Moon was at a Fiesta』を見たとき、冷たさと明るさの混じり合った独特の色遣い、人々の集中した表情、暮らしのこまやかな描写に心をつかまれました。お月さまを主人公にした物語はもちろん、絵を描いた画家が現地在住の壁画家であることもおもしろく感じ、日本の子どもたちにぜひこの絵本を届けたいと思いました。

企画を練り上げるにあたり、この力強い一冊には、どんな背景があるのか、知りたくありません。調べていくうちにいくつかのこと——主に絵のことに——がわかってきました。

この絵本は、アメリカ在住の作家マシュー・ゴラブさんがメキシコのオアハカ州に何度も旅をする中で、壁画家レオビヒルド・マルティネスさんと出会い、現地の昔話を絵本にしたものです。オアハカ州は、メキシコの南部に位置し、豊かな美術の土壌に恵まれた場所です。というのは、この土地には、マヤの人々を含め、17もの民族が住んでおり、それぞ

れの民族が自分たちのアイデンティティをあらわすために織物や彫刻、壁画などの美術を作り続けているからです。レオビヒルドさんはその伝統を受け継ぎ、ルフィーノ・タマヨの工房で修行を積んだのち、現在も壁画家として活躍をしています。

お祭りの場面に描かれた悪魔の仮面は見よう



タイトル『おまつりをたのしんだおつきさま』／文・マシュー・ゴラブ／絵・レオビヒルド・マルティネス／訳・さくまゆみこ／29×22cm／36ページ／定価本体1600円／2019年12月刊

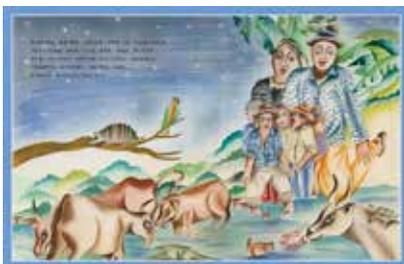
によってはおそろしくも思えます。また、モヒガンガの様子、人間や動物たちの表情やしぐさには、ある種の過剰さを感じられます。こういった要素は、メキシコのアートや文化に共通したもののようです。

詩人のオクタビオ・パスはメキシコの文化と歴史について書いた著書『孤独の迷宮』のなかで、メキシコの人々の最も顕著な特色として「怖いものを眺めること、さらにそれと交わることで生ずる

親近感と喜び」を指摘し、例として、村の教会の血だらけのキリスト像、新聞の見出しに見られる気味の悪いユーモア、死者の日に頭蓋骨をかたどったパンや菓子を食べるなどといったことをあげています。そして、メキシコの文化では、死が生を照らしだす役割をする、と語っています。

絵本のなかのある種の暗さや過剰な表現は、お祭りの生き生きとした様子を描きだすためのメキシコの特長のあらわれであるといえるかもしれません。この表現は日本の絵本ではなじみのないものではありませんが、根本にある明るさは、読者の心をひきつける力になるのではないかと、と思いました。

また、レオビヒルドさんの絵は、メキシコの壁画美術の流れも多く含んでいます。メキシコの壁画は、世界的にも非常に有名で、



巨匠としてはシケイロス、リベラ、オロスコなどがよく知られています。そして、彼らのアートが作りあげた潮流に壁画運動と呼ばれる運動があります。

1910年代、インディオやメスティーソを抑圧してきたディアス政権が打倒されたあと、革命政府は、インディオ文化もふくめた新たな国民国家を目指すようになりました。そうした中で、メキシコの画家たちは、もともとインディオ美術において重要な絵画形式であった壁画をつうじて、非識字者の多いメキシコの人々に、自分たちの歴史、風俗を伝えていこうとしました。政治とつながった壁画運動自体は、1920年代初頭を過ぎると縮小されていきましたが、壁画家たちが自分たちの文化や暮らしを伝えていこうとする姿勢は、その後も受け継がれていきました。その流れを汲んで、レオビヒルドさんもメキシコの文化や言い伝えを伝えていくことを壁画の主題にしてきたそうです。

この絵本のなかでは、オアハカ州に流れるパロアパン川流域に伝わる昔話があつかわれているだけでなく、レオビヒルドさんが絵のなかにこの地の暮らしぶりをこまやかに描いています。最初の見開きにでてくる織物をしている女性は、伝統的な腰機織りをしています。解説にもありますが、この織物は、それぞれの民族のアイデンティティをしめす大切なものだそうです。また、お祭りのシーンででてくるさまざまな飾りものや、仮面、馬の形をした子どものおもちゃなど、細部に日常のリアルな情報が描きこまれています。そして、何より、チャーミングで美しいお月さ

まの描かれ方に、この地の人々のお月さまへの愛着があらわれているでしょう。

マシューさんとマルティネスさんが心をこめてメキシコのことを伝えようとして描いたこの絵本を、さくまゆみこさんの親しみやすい日本語を通じて、子どもたちに届けたいと願いながら、編集にとりかかりました。

編集を進めていく上でも、様々なことが深まってきました。原書は、現地で出版された際、自費出版に近い形であったようで、印刷データは紛失されていました。そこで原画をスキャンし直し、デザインもタカハシデザイン室の高橋雅之さんにゼロから作り上げていただくことになりました。訳者のさくまさん、原著者のマシューさん、レオビヒルドさんともやりとりをしながら、ページ組を変更し、現地の雰囲気伝える色遣いを加え、新しいデザインが仕上がりました。また、マシューさんは日本語が堪能でいらしたので、日本語のニュアンスを検討していただくことができ、お月さまについて現地の人がどのような感情を抱いているか（お月さまが美しい憧れであり、昼間の空では色あせて見えてしまう、ということがとても残念に思えるなど……）についても、詳しく教えていただきました。他にもたくさんの方のご協力をいただき、この新刊が無事に完成いたしました。

遠く離れたメキシコにも日本と同じように月を愛でる人たちがいることを、そして、世界には多様な表現や文化があることを、この絵本から感じていただけたら、こんなに嬉しいことはありません。

(さとう ゆきこ：のら書店)